

昭和58年度

一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査概報

—坂尻遺跡第4次調査—

— 1 9 8 4 —

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
袋井市教育委員会

昭和58年度

一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査概報

—坂尻遺跡第4次調査—

— 1 9 8 4 —

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は昭和58年10月1日から昭和58年10月31日まで実施した一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報である。
2. 本調査は、建設省中部地方建設局長を委託者とし、袋井市長を受託者として袋井市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は、五島康司（袋井市教育委員会）が担当した。
4. 本書作成のための資料整理は五島が中心となり主に神谷哲司（東海大学学生）が行い、深谷直子、森永明美、芝田秀了、青山仁美が作業した。
また、次の方々の協力を得た。
寺田義昭、吉岡伸夫、永井義博、松井一明、前田庄一（袋井市教育委員会）
5. 本書は主に五島康司が執筆編集したものである。
6. 本書内の土器実測図（第5～11図）と写真図版、及び第3図の番号は、同一個体で統一してある。
7. 調査資料はすべて袋井市教育委員会で保管している。

発掘作業参加者

乗松武、福田きよ、海野こう、バ倉みつ子、鈴木きみ子、小島則子、山本敏子

目 次

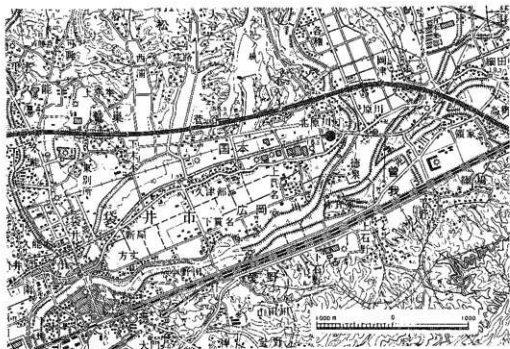
1. はじめに	1
2. 遺 構	2
3. S D26出土遺物	4
(1) 第2層出土一括土器	4
(2) 第3層出土土器	6
4. ま と め	6

挿 図 目 次

第1図 板瓦遺跡位置図	1
第2図 BOX南区平面実測図・板瓦遺跡発掘調査区	2
第3図 S D26実測図	3
第4図 S D26第3層出土土器実測図	6
第5図 S D26出土土器実測図(1)	8
第6図 S D26出土土器実測図(2)	9
第7図 S D26出土土器実測図(3)	10
第8図 S D26出土土器実測図(4)	11
第9図 S D26出土土器実測図(5)	12
第10図 S D26出土土器実測図(6)	13
第11図 S D26出土土器実測図(7)	14

図 版 目 次

図版第1 BOX南区遺構検出状況・S D26遺物出土状況
図版第2 S D26発掘風景・遺物出土状況
図版第3 遺物出土状況
図版第4 S D26出土遺物
図版第5 S D26出土遺物



第1図 坂尻遺跡位置図

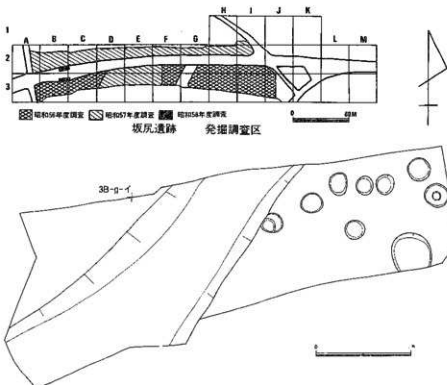
1. はじめに

国道1号袋井バイパス（袋井地区）建設工事に伴う緊急発掘調査はすでに8000㎡が終了し、現在本報告作成のための整理作業中であるが（袋井市教育委員会、坂尻遺跡第1次～第3次概報1981～1983）、本年度国道の北側と南側を結びバイパスの下を通る地下道の工事が一部分計画された。この地下道はボックス（BOX）と呼ばれ、工事が現国道一号線におよぶため自動車の迂回路を確保する必要が生じた。その迂回路工事によって、国道の北側と南側が長さ約10m、幅3m程破壊されることとなり、建設省との協議によって、10月から発掘調査が開始された。

今回の調査では国道の北側をBOX北区、国道の南側をBOX南区とした。

発掘調査にさきだて、現国道のコンクリート側溝を取りのぞき、調査区を設定した。BOX北区、南区とも測溝のあった部分は幅約80cm程が第Ⅲ層の一部まで壊されていたが、BOX北区約28㎡、BOX南区約30㎡を調査することができた。

調査は、56、57年度調査の大小グリッドを踏襲して遺物を取り上げた。交通量の多い国道をはさんでの調査であること、すでにバイパスの基盤工事（土盛等）が開始され、重機がすぐ近くで作業することなど、安全面で気をつかう調査であった。途中、雨の日も多く排水に追われたが、古墳時代後半の付付甕を含む一括資料が出土するなどの成果を得て、約4週間の調査を終了した。



第2図 BOX南区平面実測図

2. 遺 構

BOX北区からは古墳時代の土師器を伴う焼土と奈良時代の堅穴状遺構が検出された。BOX南区では柱根が検出された柱穴を含め、掘立柱建物の一部を形成すると考えられる柱穴列が検出されている。また、古墳時代の溝状遺構SD26が検出された。

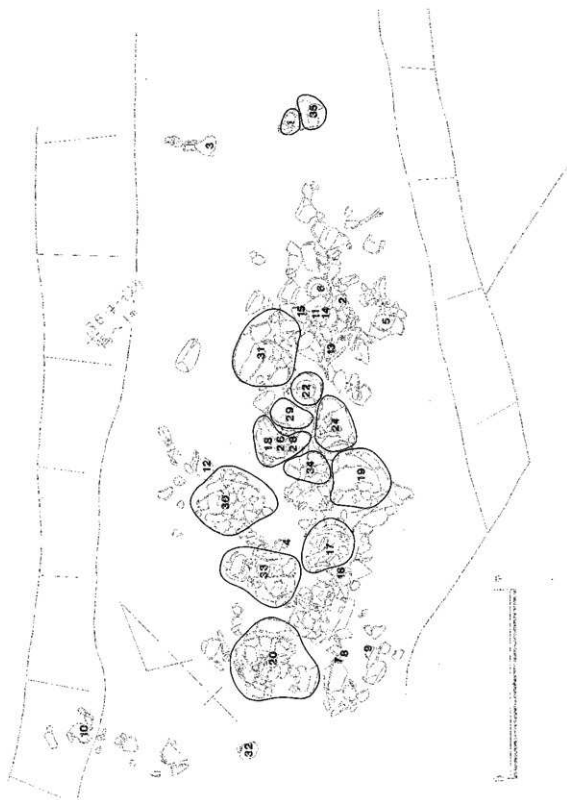
本概報では、古墳時代後半の一括資料を出土した溝状遺構SD26についての概要を述べる。

SD26はBOX南区第2面で検出された北東から南西へとのびる溝状遺構である(第2図)。調査面積がせまいためごく一部の調査にとどまったが、SD26は幅約2.4~2.6m、完掘時の溝の深さは約45~60cmを測る。溝の壁がややまっすぐに立ち上がる断面U字形の溝である。

溝の覆土は以下のとおりである。

- 第1層 赤褐色土層 (土師片、炭化物、マンガン粒子を含む)
- 第2層 明赤褐色土層 (土師片、炭化物、管鉄多い)
- 第3層 暗灰色粘土層 (粘性が強い)
- 第4層 青灰色砂質粘土層(溝底面)

土師器を主とする一括土器は、第2層から第3層の上面に広がって出土した(第2層出土一括土器、第3図)。第3層の最下位から溝底面(第4層)にかけて、遺物量は少ないが、土師器(第4図)が出土している。



Map of the Bay of the ...

3. S D26出土遺物

(1) 第2層出土一括土器 (第3図・第5～10図)

約2.5m×1m 程の範囲にまとまり、土器と土器とが重なりあった状態で出土した。これらの遺物の器種別の組成は以下になる。

台付甕	4個体 (残存率 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{3}{4}$ 以上)	小型甕	1個体 (完形)
長胴甕	6個体 (残存率 $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ 以上)	把手付甕型土器	1個体 (残存率 $\frac{1}{4}$)
甕	3個体 (残存率 $\frac{1}{2}$ 以上2個体)	土師器環類	6個体 (残存率 $\frac{1}{2}$ 以上)
大型甕	1個体 (残存率 $\frac{1}{4}$)	須恵器坏蓋	2個体 (残存率 $\frac{1}{2}$ 以上)

須恵器

・坏蓋 (第5図1・2)

1は天井部から体部中位までへう削り調整が施され、口縁部に沈線が入るものである。口径11.3cm、器高4.3cm。2の坏蓋も1とはほぼ同じ大きさで、天井部外周から体部下位にかけてへう削り調整が施されており、口縁部に沈線を有する。口径11.4cm、器高4.5cm。

いずれも遼考研編年の第Ⅲ期後葉に比定できる。

・坏身 (第5図3)

3は一括土器より北東に50cm 程離れた位置で単独で出土したものである。焼成が悪く、表面剝離が著しい土器である。受け部は横に開き、立ち上がりが低い。口径13.1cm に対して器高が4.2cm と低いものである。

土師器

・模倣坏蓋 (第5図4・5)

4、5とも天井部を平坦につくが、5は口径12.8cm、器高4.5cm であり、4は口径14.0cm に対し器高は4.1cm と低い。

・坏身 (第5図6～15)

6、7は模倣坏身である。いずれも表面剝離が著しいが、6には底部外周に体部方向へのハケ目調整が見られる。

8～15の坏身は、器高が小さい8を除いて2つのタイプに分けることができる。口径に対して器高があまり大きくなく、底部が平らで口縁部がわずかに内湾するタイプ (9～11) と、口径に対し器高が大きく、底部が丸底に近いタイプ (12～15) がある。12、13はいずれも口径11cm、器高5cm 程で小型であり口縁部が内湾している。

・小型甕 (第5図16)

口径6.5cm、器高13.2cm。完形で出土した。左右が対称形でなくいびつで、器壁が厚い。口唇部は内側に折り返されており、内面下位はへう状工具による削り痕が見られ、上位には顕著な指頭痕が残る。外面の約 $\frac{1}{2}$ は口唇部から底部にかけて火を受けており表面が剝離している。2～3mm 程の長石、石英粒子を多量に含んでいる。底部には木炭痕が残る。

・台付壺（第6図17・18、第7図19～21）

台付壺は5点出土している（1点は台部分のみ）。口径27～37cm、器高33～38cmと、大型の土器である。口縁部は立ち上がりつつ、外反する口唇部をもつ。口縁部と強い角度をもって接合する肩部は球形に張り出し、最大径が胴部上位にある。胴部下半には顕著な接合痕が見られ、19の他は台部接合部まで直線的な外形を呈している（17・18・20）。台部接合部径は台部底径の約 $\frac{1}{2}$ で背の高い台形である。台部端部は、ハケ目調整の後にいずれも強く折り返されているが、20のように明瞭でないものもある。口縁部外面は横ナデ調整であり、体部には左上から右下方向のハケ目調整がていねいに施されているが、胴部下半の接合部では接合痕を消すために横位のハケ目による調整が顕著なもの（18）もある。（口縁部内面から胴部にはハケ目調整が見られるが、20のように胴部下半の接合部以下にのみハケ目調整が見られるものもある。）台部には内外面ともハケ目調整が施されるが、外面は縦位のハケ目調整を基本とし内面には横位のハケ目調整が施される。台内部上面には指頭痕が見られる。台部に体部を接合させて作成するためか、壺底部が窪んでいるものが多い。いずれも使用されているため、火を受けて胴部下半より台部上位には煤が付着している。

17は口縁部が強く立ち上がりつつ口唇部が外反し、端部はわずかにつまみ上げられている。肩部の張りが強く胴部は球形を呈する。胴部下半の接合痕が明瞭であり、台部下半がわずかに外反している。

18は口縁部が欠損している。口縁部と肩部との接合は強い角度で行われるため、肩部上位内面に指頭痕が残る。胴部は球形で下半の接合部には粘土の重なりが明瞭に残り、ここから台部接合部まで直線的な外形を呈する。

19はしっかりした立ち上がる口縁を有するが、口唇部はほとんど外反していない。胴部下半も他のものに比べ丸味を帯びている。台部下半は欠損している。

20は肩部が張り出した球形の体部を有する壺である。台部の端部折り返しが他のものに比べ不明瞭である。

21は台部だけの出土である。

・長胴壺（第8図22～24、第9図25～28）

長胴壺で完形で出土したものは1点のみ（24）であったが、7点を図化することができた。

口縁部の形態から22・23のように口縁部がやや肉厚で舌状の断面をもち、口縁部と体部との接合部分に明瞭な稜を有するものと、24～28のように口縁部が立ち上がりつつ口唇部にかけて外反するタイプのものとに大別することができる。

・壺（第10図29・30）

いずれも立ち上がった口縁部を有する。30は大型の壺で体部上位に最大径を有し、胴部が張っている。底部は平底であるが、底部外周は丸味を帯びている。

・把手付壺型土器（第10図31）

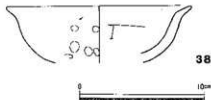
体部上位に最大径を有する大型の壺である。口縁部及び丸味を帯びた底部の造りなど、30の壺と酷似している。胴部上位に把手を有する。



36



37



38

第4図 S D 26第3層出土土器実測図

したが、いずれも小片であった。

須恵器として环蓋（第4図36・37）が出土している。36は外面に肩部近くまで回転ヘラ削り調整がみられ、肩部には工具による沈線が突帯を作っている。端部に段を有する。37は36に比べるとやや開ききみであり、肩部の沈線は弱く、突帯は見られない。端部にも段を持たない。いずれも遼考研編年の第Ⅲ期中葉に比定できる。38は上師器の高坏の坏部である。

4. ま と め

B O X南区は調査面積がわずか30㎡という範囲であったが、S D 26より出土した一括土器は残存率が高く、坂尻遺跡の古墳時代後半期の土器編年を考える上で価値の高い資料といえる。

これらの一括土器は同一土層内に集中し、重なり合って出土していることから同時期の廃棄と考えられ、土器の使用期間を考慮すべきであるが、遼考研編年のⅢ期後葉の坏類が共伴していることから7世紀初頭期に比定できる一括資料である。台付甕、甗、長胴甕、甗、把手付甕型土器、坏類と多様な器種が出土していることは、古墳時代後半の土器セットを考える上でも良好な資料であるといえよう。今後、このように完形に近い土器を同時期にまとめて廃棄なくしてはならなかった外的要因についても検討してみる必要があろう。

これらの土器が台付甕をはじめ大型であることは、時期的、地方的特色、さらには遺跡の性格的面からも考えてみる必要がある。土器の容積を土器実測図の断面図から積分計算によって求めた結果、No 17の台付甕は13.1ℓ、No 18の台付甕は18.7ℓであった。No 24の長胴甕が4.7ℓであることからみても、このように大型の台付甕が一般的に用いられていたとは考えにくい。台付甕だけでなく、甗、甗類なども大型であることは、奈良期に入って遠江国佐野郡の郡衙として形成される以前の坂尻遺跡を考える上で重要なことであろう。

弥生時代中期末葉より出現する台付甕は後期初頭にはS字口縁を有する台付甕と、「く」の

・把手付鉢型土器（第10図32）

胴部の一部が出土したもので、底部は欠損する。体部からはほぼ垂直に伸びる口縁を有する小型の鉢型土器である。

・甗（第11図33～35）

33は把手を体部のほぼ中位に持つ直胴型の甗である。内面に少し折り返しのある口縁部を有し、底部の端部をわずかに内湾させている。

34は33より少し大型の直胴型の甗である。口縁部に折り返しはなく、底部の端部も真直ぐである。体部中位より少し上に把手が付けられている。

(2) 第3層出土土器（第4図）

第3層はS D 26の最下層である。この層の下位または溝底部（第4層）より数点の土器が出土

字に屈曲する口縁を有する台付甕と平行して使用されるようになり、宮土市三新田遺跡の甕G類、甕H類、湖西市東笠子遺跡群C-9遺構出土台付甕などのようにいずれも口径が30~40cm程になる例もある。このように大型化した台付甕も5世紀前葉（和泉式の古い時期）を最後として終焉を迎えると言われてきた。しかし、最近古墳時代末葉、そして奈良時代の発掘調査から台付甕の存在が少しずつ報告されるようになってきている。

城山遺跡では胴部が球形で大型の土器を埴（ナベ）として報告し、台の付く例もあるようであるとしている。また、伊場遺跡、梶子遺跡、半田山古墳A支群出土の台付甕は7世紀後葉から奈良時代とされている。これらの台付甕は、①口縁部の立ち上がり弱い ②胴部の張り出しが少ない ③台部が低く安定し、端部が少し外反する ④口径が胴部径に対し大きく、開いている ⑤重心が下位にあり安定した形である。などの共通点が見られる。これに対し、SD26出土の台付甕は、①胴部が球形に強く張り出す ②台部の器高が高い ③重心が上位にあり、力強い形である。などが特徴であり、7世紀初頭から8世紀へかけての台付甕の形態変化をうかがうことができる。

台付甕はSD26で一括出土したように完形または半完形で出土することはまれであったため十分評価されていなかったと思われる。坂尻遺跡でも出土遺物を再検討した結果、10程の遺構（古墳時代後葉~奈良時代）で台付甕の破片を確認することができた。また、第3次概報に記載されているSD20出土の第18図43は台付甕の台部であり、44~51の甕も台付甕である可能性が高く、訂正したい。

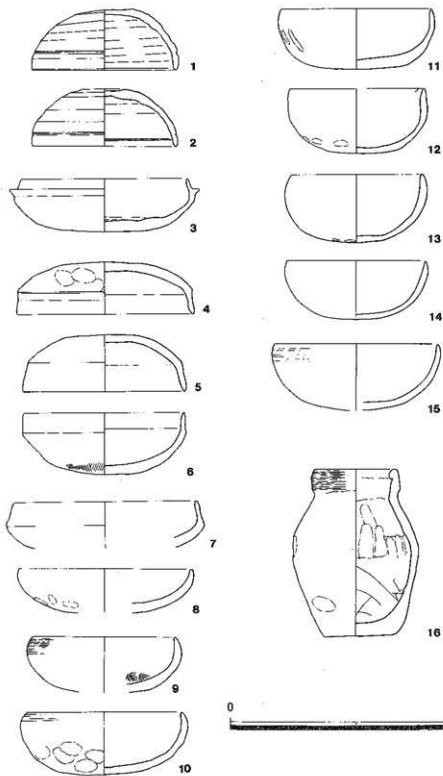
5世紀代に消滅したと言われている台付甕が突如として古墳時代末葉または奈良時代に大型台付甕として出現することはやはり不自然である。5世紀代と7世紀末葉、8世紀代をつなぐ台付甕の系譜が存在することは予想されるべきであり、SD26出土の台付甕はこの7世紀代を埋める資料となろう。

7世紀代はすでに鬼高期より造られるかまどが使用され、長胴甕が盛んに使用された時期でもあるが、かまどのない場所でも必要に応じて活用できる台付甕も使用されていたことは古墳時代後葉から奈良時代の社会をとらえる上でも十分検討されていくべき問題となろう。

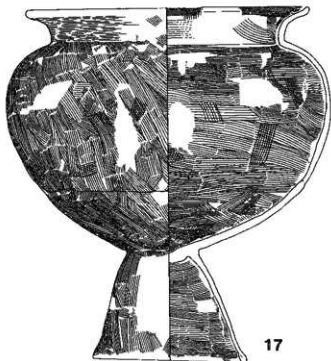
本概報をまとめるのに際し、向坂鋼二、漆畑敏、鈴木敏則、永井義博、松井一明の各氏には特に多くの御助言をいただきました。深く感謝致します。

参 考 文 献

1. 1974 考古学雑誌第60号第2巻「飛鳥地域出土の古式土師器」安達厚二・木下正史
2. 1968 名古屋大学文学部研究論集（史学）「弥生式土器から土師器へ」大参義一
3. 1981 浜名郡可美村教育委員会「城山遺跡」
4. 1981 湖西市教育委員会「東笠子遺跡発掘調査概報」
5. 1983 富士市教育委員会「三新田遺跡発掘調査報告書」
6. 1983 浜松市遺跡調査会「国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第VI次発掘調査概報」
7. 1984 浜松市遺跡調査会「半田山古墳群A小支群半田山Ⅲ遺跡」
8. 1981~1983 袋井市教育委員会他「一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書一坂尻遺跡第1次~3次概報」



第5圖 SD26出土器実測図(1)



17

台付甕

図版No. 5—17

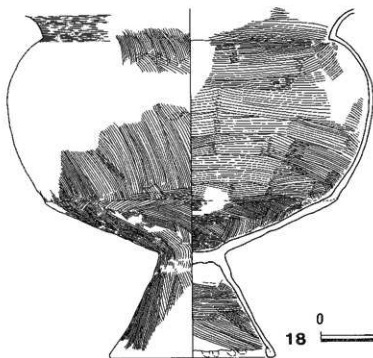
口径 30.0cm

器高 37.5cm

底径 16.2cm

残存率 3/5

17



18台付甕

図版No. 5—18

口径 (37.5cm)

器高 (38.0cm)

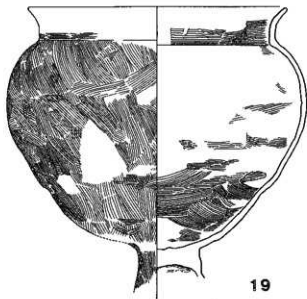
底径 18.0cm

残存率 2/5

18



第6図 S D26出土土器実測図(2)



19

台付甕

図版No. 5—19

口径 27.4cm

器高 (30.4cm)

残存率 1/2

20

台付甕

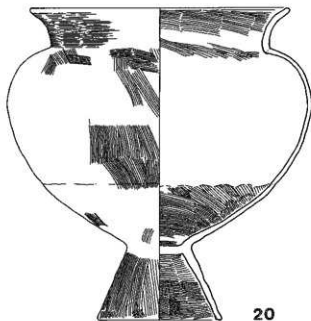
図版No. 5—20

口径 27.6cm

器高 33.5cm

底径 13.2cm

残存率 2/3



20

21

台付甕

器高 10.5cm

底径 14.6cm

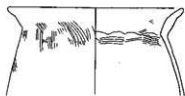
残存率 脚1/1



21



第7図 S D 26出土土器実測図(3)



22

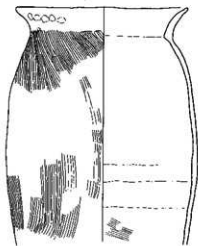
22

長胴甕

図版No. 4—22

口径 18.6cm

残存率 1/4



23

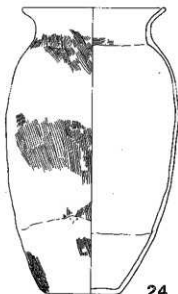
23

長胴甕

図版No. 4—23

口径 18.2cm

残存率 1/2



24

24

長胴甕

口径 15.0cm

器高 30.7cm

底径 7.5cm

残存率 1/2



第8図 S D26出土土器実測図(4)



25



28

28

長胴甕

口径 16.8cm

残存率 1/16



26

25

長胴甕

口径 17.7cm

残存率 1/5

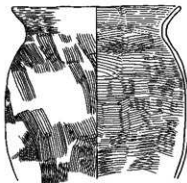
26

長胴甕

図版No. 4—26

口径 16.8cm

残存率 1/4



27

27

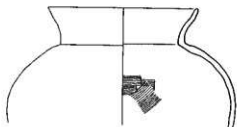
長胴甕

口径 17.8cm

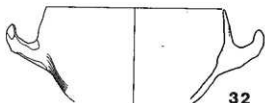
残存率 1/3



第9図 S D26出土土器実測図(5)



29



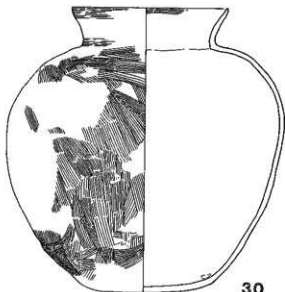
32

32

把手付鉢型土器

口径 16.6cm

残存率 1/6



30

29

壺

口径 15.8cm

残存率 1/4

30

壺

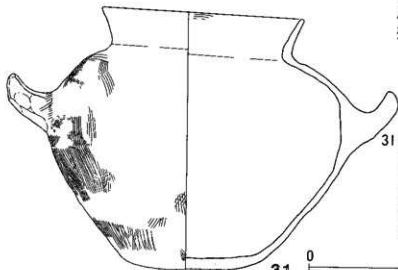
図版No. 4—30

口径 16.6cm

器高 30.4cm

底径 13.8cm

残存率 4/5



31

31 把手付壺型土器

図版No. 4—31

口径 21.4cm

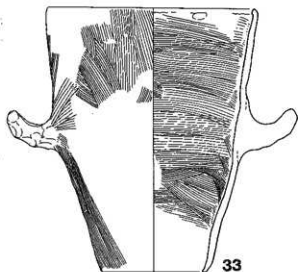
器高 27.7cm

底径 14.5cm

残存率 4/5



第10図 S D 26出土土器実測図(6)



33

甗

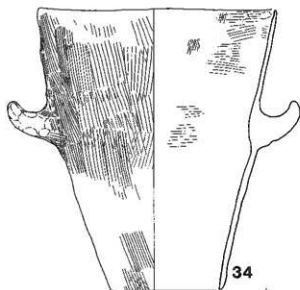
图版No. 5—33

口径 22.5cm

器高 27.8cm

底径 11.5cm

残存率 3/4



34

甗

图版No. 5—34

口径 25.4cm

器高 29.8cm

底径 11.5cm

残存率 3/4

0 20cm



35

甗

残存率 1/6



第11图 S D 26出土土器实测图(7)



BOX南区遺構検出状況（南より）



SD26遺物出土状況（北より）

SD26

発掘風景



遺物出土状況
(東より)



遺物出土状況
(土器No.18, 22, 24)



遺物出土状況
(土器No19, 24)



遺物出土状況
(土器No20)



遺物出土状況
(土器No12, 30)



16



1



2



6



10



12



30



31



22



23



26





20



18



19



17



33



34

一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)

埋蔵文化財発掘調査報告書

—板尻遺跡第4次調査—

1984年3月31日

編集 袋井市教育委員会

浜松市中沢町1-1

印刷所 株式会社 開 明 堂